

# 英国独立学校の監督生制度に関する一考察

## —変容するプリフェクトに焦点を当てて—

古阪 肇

### はじめに

「英国パブリック・スクール」の俗称で親しまれる英国独立学校には、いくつもの伝統が見られる。そのひとつが監督生制度、またはプリフェクト制度 (prefect system) と呼ばれるものである。

プリフェクト (prefect) は、後に詳述するが、端的に言うとは監督生と邦訳され、主として英国独立学校において、いわゆる学校の生徒会役員、学級における委員長の役割を果たす代表生徒を指す用語として現在も使用されている。特に寄宿制を採る学校では、ハウス (House) と呼ばれる寮において、プリフェクトは、ハウスマスター<sup>1</sup>と下級生の間に立つ重要な役割を担っている。しかし、歴史的観点から見ると、監督生制度が変容してきていることは明らかである。特に後述するファギング制度と対を成して機能していた監督生制度は、現在のそれとは大きく異なる部分を有していた。

プリフェクト (prefect) という名称は学校によってバリエーションがある。後に列挙する、ザ・ナイン (The Nine) と呼称される最も伝統的な代表校9校について例示すると、たとえばウィンチェスター校ではプリフェクトで使用される名称が、シュルーズベリー校やイトン校、ラグビー校ではプリポスター (praepostor)、そしてハロウ校やチャーターハウスではモニター (monitor) と呼ばれる。また、ザ・ナインの中では主として通学制を採り、初等教育段階のプレップスクールを併設しているセントポールズ校では、初等教育段階の最終学年で選出される監督生をモニター、中等教育段階の監督生をプリフェクトという名称で呼んでいる<sup>2</sup>。これらはいずれも監督生を意味するが、学校によって異なる名称を使用しており、それぞれが各学校の最上級生の特権的な役割として、各名称を維持してきた。ただし、本論で監督生について英語を用いる場合は、プリフェクトの名称で統一することとする。

監督生制度に関する先行研究については、国内外において前世紀を扱ったものが中心となる。特に次の2点についての言及が目立つ。1つめは19世紀前半に実在したラグビー校校長のトマス・アーノルド (Arnold, Thomas) が、プリフェクトの存在を巧妙に利用し、学校自治の改革を行っ

たことに関する文脈において言及される場合<sup>3</sup>、2つめはアーノルドの教え子であるトマス・ヒューズ (Hughes, Thomas) によって1857年に発表された小説、『トム・ブラウンの学校生活』の中で描写されるプリフェクトの言動が、当時の監督生制度の実態を反映するものとして紹介されている場合<sup>4</sup>である。その他、特に1、2とは関連しない文脈において、歴史的観点および時系列的観点の中で英国独立学校の特徴について詳述されている場合<sup>5</sup>や、近代の英国独立学校の改革に大きな役割を果たしたクラレンドン委員会による実態調査(1861年)および同報告書(1864年)に関する文脈、あるいはアーノルドを描いた伝記、元校長などの回想録など、特定の事象に関連付けてプリフェクトおよび監督生制度に言及している文献も見られる<sup>6</sup>。一方で、現在の監督生制度やプリフェクトについて記述されているものは近代以前を扱ったものに比して、総じて稀少になる傾向は否めない<sup>7</sup>。ただし、歴史の中での監督生制度だけでなく、世紀を跨いで現代に至る一定期間の中で、英国独立学校における最上級生の役割がどのように変化してきたかについて言及している文献は注目に値する<sup>8</sup>。

本論文は、以上の先行研究を踏まえ、文献調査において読み取れる過去の監督生制度を概観した上で、時代が下るとそれらがどのように変容したかについて言及する。そして、現在の監督生制度やプリフェクトについてインタビュー調査等を実施した結果を取り上げ、同制度に関する過去と現在の相違点・類似点について考察することを目的とする。

近年の監督生制度に関しては、英国における学校訪問時に教職員に対して実施したインタビュー調査や、寄宿制独立学校においてプリフェクトの経験がある卒業生に対するインタビュー調査、さらに比較的最近に当該校を卒業した元パブリック・スクール生への調査の結果を適宜交えて論じるものとする。教職員・監督生経験者・元生徒の三者の立場から、それぞれが捉えた現在のプリフェクトに対する実態や監督生制度の特徴を把握し、過去と現在の監督生制度の特徴や役割について比較教育的見地から検討する。

## 1. 英国独立学校と監督生制度

英国独立学校は端的には私立学校を指し、その一部が「パブリック・スクール」という俗称で呼ばれ、いわゆる紳士養成のための学校として、英国の教育の中でその伝統が数世紀にわたって継承されてきた。独立学校の中のどの学校をパブリック・スクールと位置づけるかについては、先行研究の中で研究者や専門家がそれぞれ定義を行ってきている。

例えば、英国教育の研究者でパブリック・スクールにも詳しい竹内は、「主として寄宿制で、授業料が高く、豊かな階級の子弟を全国規模で集めている私立中等学校」<sup>9</sup>と定義している。同じく、独立学校をスポーツの面から研究している鈴木も、パブリック・スクールについて独自の解釈をしており、「私立学校の中でもごく一部の有名な中等学校で、英国社会の長い歴史の中で慣習的に社会通念として認知されてきた数十校」<sup>10</sup>という一定基準を設けている。さらに”パブリック・スクールの歴史を体系的にまとめているオギルヴィ (Ogilvie, Vivian) は著書の中でそれらの学校の特徴

をまとめ、①裕福な人たちのための高級学校、②学費が高い、③地方的でなく英国全土から生徒が集まる、④ほとんどが寄宿学校である、⑤国や地方からは独立しているが財産が私的に所有、運営されているわけではない、とした上で明らかにパブリック・スクールであっても上記5項目を満たしていないところもある、と書き添えている<sup>11</sup>。以上を参照すると、パブリック・スクールは「社会通念的に有名で、学校自体が裕福であり、また受け入れる生徒も裕福な者が多い私立学校」という像が浮かび上がってくる。

寄宿制の英国独立学校では、現在、特にハウスキャプテン (House captain) やスポーツキャプテン (Sports captain) と呼ばれるプリフェクトが代表生徒としてリーダーシップを発揮し、学校生活において重要な役割を果たしている。寄宿制学校はボーディングスクールとも呼ばれ、英国の独立学校の中にも寄宿制を維持する学校が多い。近年の独立学校は、いわゆる寄宿生活を通して人格陶冶を期待する紳士養成校としてより、大学に向けた進学準備校としての役割の方がさらに重要視されてきたこともあり、学費の高い寄宿制学校より通学制の学校を希望する生徒や保護者が多い<sup>12</sup>。

しかし、1861年にクラレンドン委員会によって調査され、1868年のパブリック・スクール法で代表校として認可された伝統校9校 (The Nine) については、1校を除き、学校の全体または一部で現在も寄宿制を維持している。これらの学校群の創立はいずれも数世紀前にさかのぼり、14世紀末から17世紀初頭に集中している。年度順 (括弧内創立年度) に列挙すると、ウィンチェスター校 (1382年)、イートン校 (1440年)、セントポールズ校 (1509年)、シュルーズベリー校 (1551年)、ウェストミンスター校 (1560年)、マーチャントテイラーズ校 (1561年)、ラグビー校 (1567年)、ハロウ校 (1571年)、チャーターハウス校 (1611年) となる。本論では、特に教職員へのインタビューを、この中のウィンチェスター校、シュルーズベリー校、ハロウ校で実施した。さらにプリフェクトを経験した卒業生 (2004 - 2009年在籍) がイートン校、そして元生徒への聞き取り調査の中にはセントポールズ校の出身生が含まれる。

さて、辞書における **prefect** (プリフェクト) の説明としては、オックスフォード現代英英辞典では、同語を「(英国のいくつかの学校において) 年少の生徒に対する権力やその他いくらかの責任が付与された年長生徒」と記載されている<sup>13</sup>。また **monitor** (モニター) の説明としてはプリフェクトと同意義の内容が記載されている。いずれの単語も英国の学校において専門的な意味づけがなされた上で使用されているが、特に **praepostor** (プリポスター) は一般的な辞書には記載がない場合もある。一方、英和辞典を例に挙げると、たとえば講談社英和辞典においては、プリフェクトは英国の私立学校という限定がなされ、「監督生、規律維持の権限をもつ上級生」と記されている。そしてプリポスターは、「英国パブリック・スクールの、」と前置きを示した上で「級長、監督指導生」という言葉で説明している。さらにモニターは「(学校の) 級長、クラス委員」また項目を分けて「モニター；監督者 (風紀問題などについて)」と記載されている。後者の辞書については、特にプリフェクトとプリポスターを英国の私立学校あるいはパブリック・スクールについて使用さ

れる用語と指定した上で、意味が表示されている<sup>14</sup>。

監督生や級長の役割を果たすということは上記より把握できるが、モニターについてはプリフェクトの歴史の中で重要な役割を果たした「モニトリアル・システム」(Monitorial System)と関連がある用語として捉えることができる。同システムは19世紀初頭に開発されたものであり、教師がモニターの名称で呼ばれる年長の代表生徒にまず授業内容を教授し、それを年少の生徒に教え伝えるという方式である<sup>15</sup>。すべての独立学校で同システムが導入されていたわけではなく、またプリフェクトになった生徒が、すなわちこのような教師の助教的役割を果たしていたわけではない。しかし教師不足が原因で大勢の生徒を一度に教授することが困難であること、また教師の絶対数の不足から生徒の規律統制や管理の徹底が行き届かない状況であったことを勘案すると、教師がモニターを授業に巧みに取り込むことができた場合には、大きな効果が発揮されるものと推断される。

## 2. 監督生制度の歴史的諸考察

### 2-1. プリフェクトとプリフェクト・ファギング制度

監督生制度は、通常最上級生をプリフェクトに任命し、下級生の指導ならびに生徒自治と規律の責任を負わせるものという意味においては、過去・現在問わずその形式は概ね同様であると言える。しかし以前はプリフェクト・ファギング制度(prefect-fagging system)と呼称され、雑用係(fag)と対になる用語として監督生(prefect)が存在した。プリフェクトと対になる身分のファッグは、下級生が担当し、1960年代頃までは、プリフェクトと雑役生の関係は独立学校のひとつの学校文化を形成していた。

上述のように、教師を補助する立場として19世紀から存在した監督生制度であるが、同制度の歴史においては個人的な雑用をさせるファッグに対しては絶対的な権限を持ち、それが頻繁に彼らに対する苛めを伴った。そのため監督生制度は合法的な奴隷制度とも言われてきた<sup>16</sup>。実際に、ファッグは担当のプリフェクトの召使として様々な身の回りの世話を行っていた。例えば彼らの朝食の準備、食器磨き、お茶の用意、着物および靴のブラシがけ、買い物の使い走り、伝達係、部屋の掃除など日常生活に関わる基本的な世話に留まらず、朝早起きして薪を燃やして部屋を暖めたり、プリフェクトの洗顔用の水や湯を運んだり、さらには、夜は多くのパブリック・スクールの最上級生がダイニングルームに行かずに自分の部屋で食事をするため、それらの準備を整えたり、季節によってはプリフェクトの就寝前にベッドを予め体温で暖めておくという、極めて個人的な細微にわたることまで奉仕しなければならなかった。

封建時代の名残とも思われるこのファギング制度であるが、プリフェクトは、多くの場合下級生の中から専属の召使い役として従事するファッグをもつことができた。その代わりにファッグは、制度上においては、見返りにプリフェクトからの恩恵を受けることができるという関係が成り立っている。プリフェクト・ファギング制度では、ファッグになった者はマスターと呼ばれる担当のプリフェクトについて、上述のように様々な身の回りの世話をを行ったが、プリフェクトとファッグが

一対一の関係ではなく、予めどのプリフェクトにどのファッグがつくかという担当が決められていない学校もあった。

プリフェクトの役割について、シュルーズベリー校の校長であったバトラー (Butler, S.)<sup>17</sup> は次のような見解を示している。「監督生とは、教員に信頼され、その権限の一部を委任された者である。プリフェクトの仕事内容は、生徒間に秩序を保ち、どのような種類の誤りも未然に防ぎ、規則違反者の名前を校長に告げるというものである」としている<sup>18</sup>。具体的な仕事としては、教室・ホール・礼拝堂・教会において静粛を保つこと、お祈りの文句を唱えること、学校やハウスにて喫煙や飲酒を取り締まること、さらに学校の自由区域外に出る者がいないか見廻ること、各場所において出席が義務付けられている行事に欠席した者に欠席理由を尋ねること、校長が生徒に罰を与える時、罰せられる者を呼び出したりムチを持参したりすること、等多岐に亘るものであった<sup>19</sup>。

## 2-2. トマス・アーノルドとプリフェクト・ファギング制度

さて、既述のような細微にわたる雑務を上級生のために行わなければならなかったファッグであるが、ファギング制度について、アーノルド (Arnold, T.) は生徒にとって有益な制度だと確信していた<sup>20</sup>。

アーノルドは既述のとおり、ラグビー校の校長に就任し、パブリック・スクールの改革に大きく貢献した人物である。活躍時期は1861年にクラレンドン委員会が結成され、全面的な英国独立学校の調査が実施される前の時期にあたる。アーノルドがラグビー校の校長職にあったのは1828年から病死する1842年の14年間である。パブリック・スクールの改革については、アーノルドの校長就任以前より、他のパブリック・スクールの校長らによって既に始動しており、ザ・ナインの中では上述したシュルーズベリー校のバトラーの他に、チャーターハウス校のラッセル (Russel, J.)、イートン校のホートリ (Hawtrey, E.C.) らの名前も挙げられる。しかし、改革史上最も有名な校長はラグビー校のアーノルドであろう<sup>21</sup>。そして彼の行ったパブリック・スクール改革のひとつに監督生制度がある。

監督生制度の開始自体は、各校ともに創立期にさかのぼり、学校創設時の定款に監督生制度について特記されている例も見受けられる。例えばウィンチェスター校では、人間性、知識面で優れた上級生を選抜し、下級生の部屋に監視役を担う給費生を配置することについて記載されている<sup>22</sup>。監督生制度は特に16世紀には、ウィンチェスター校とイートン校両校において活発に機能していた<sup>23</sup>。この点に鑑み、アーノルドは以前より存在していた監督生制度の役割に変革を加え、従来のような下級生の監視役の範疇を超えて、プリフェクトに大きな権限を与えることで、学年を異にする生徒間の自治組織を形成していこうとする取り組みに着手した。

アーノルドはプリフェクト・ファギング制度に肯定的な意見を持っており、監督生制度の改革を敢行した。アーノルドの考えるファギング制度に対する意見は次のとおりである。

「ファギング制度は、パブリック・スクールのように大勢の生徒が終日共同生活を営む空間で

は必須のシステムである。体力で勝る者が、向う見ずな暴君になるという無政府状態を回避し、生徒間で合法的な自治の実施が運営されるようにするため、最上級生に最高権力を付与するのである。最年長の彼らは、最高の強さと知性を備え、最も尊敬されるべき人格を有する者たちである。(中略) 彼らの仕事は生徒間の秩序維持のほか、非合法的な行動や強者による弱者の専横を防止することである。もし合法的なファギング制度がなければ、怠惰で無知、さらに道徳心を持たない輩が、力で他生徒を服従することになろう。ファギング制度に反対する世論の声に流されれば、多くの生徒を規則上では平等を謳い、実際には強者が弱者を不条理に暴力で支配する状況に陥らせる。無論このような生徒間の秩序維持は、教師によって図られることでもある。しかし現状ではそのために必要となる教師を配備することは、不可能である。加えて年少生徒が優秀な年長生徒に対し、合法的に従属することは悪しきことではない。それは勝手気ままな恣意への服従ではなく、真の優越への服従というものである。己のためではなく、集団全体のために行使される権力への服従である。それは抑圧に当たらない。なぜならそれは服従する人間にとって利益となるからである。さらにファグとしての奉仕を通して習得する躰は、教育上肝要なものなのである。』<sup>24</sup>

アーノルドは以上のような理想を掲げつつ、プリフェクトとなるべき最上級生の教育や制度面への配慮に細心の注意を払っていた。しかしながら、特権を悪用される可能性への懸念よりも、プリフェクトとなる最上級生がアーノルドの指導によって、彼の思い描く完璧な生徒像になることを前提として教義を説くことに最大の力点が置かれている。このことから、アーノルドが持つ若干の楽観的性格および人間に対する性善説の立場をとる思想が窺える。ただし、アーノルドは自身の経験上、全ての学年の生徒をむち打ち等の厳罰主義で対応することでは、首尾よく学内秩序を保持することが困難であると悟っていた。そこで最高学年の生徒に下級生のむち打ちの権限を含む大きな権限と、それに伴う責任を付与し、生徒間の自治運営が首尾よく機能するよう尽力した。

懲罰に関してアーノルドは、「(最高学年の) 六年級生は、在校生 300 名中 30 名もいる。年齢は 17、8 歳にも達し、体力も知力も高く、また最も賢明でなくてはならぬ。むちでおどしても、早や彼らの理性と感情は、むちを素直に受け入れる年齢ではない。いたずらにむちにこだわる従来の訓育法には限界がある。むちは成長する青年の心理を全然省みない者の方法である。』<sup>25</sup>と判断する一方、彼ら自身が下級生の秩序を統制するためには適宜鞭の使用を許可する措置を取り、プリフェクトの役割を与えていた。プリフェクトの仕事の内容としては次の 4 点をはじめとする校内全般のあらゆることであり、その目標とするところとして、3 点を掲げている。

#### プリフェクトの主な仕事内容

- (1) 食事中は食卓の端にいて世話、監督する
- (2) 集会の指揮、点呼をとる
- (3) 校内、室内の指導監督、火気の取締り
- (4) 生徒間の紛争の仲裁、解決

上記内容によって目標とするところ

- (1) 生徒間の正常な秩序の維持
- (2) 校内の悪弊の排除
- (3) 暴力を排除し、下級生を保護する<sup>26</sup>

そして、もしプリフェクトに適任者を得ない場合には、ハウス内の秩序が乱れ、「トム・ブラウンの独立への戦い」が勃発するのである<sup>27</sup>。

『トム・ブラウンの学校生活』については冒頭で言及したが、1857年初版のヒューズによる自伝的要素の強い小説である。実際アーノルドがラグビー校の校長に就任していた当時の同校の様子が窺える、独立学校研究の要となる文献のひとつである。同小説は主人公トム・ブラウン (Tom Brown) がラグビー校に学んだ数年間を中心となっており、入学直後から友人となったイースト (East) や、途中から新入生として入学してきた、学業優秀で信心深い病弱なアーサー (Arthur)、プリフェクトのブルック (Brooke) や下級生いじめの酷い5年級のフラッシュマン (Flashman)、そしてアーノルド校長らとの生活の中で、トムがクリスチャン・ジェントルマンとして成長していく過程が描写されている<sup>28</sup>。上述の秩序の乱れや「独立への戦い」の勃発に関して、同小説では上級生フラッシュマンの横暴かつ残虐ないじめにトムも被害を受けており、暖炉前での火炙りなど明らかな逸脱行為も見られる。トムはこのような度を越えたフラッシュマンを中心とする上級生の専横の行為に、最後には反旗を翻すのである。本文献は小説ではあるが、プリフェクト・ファギング制度を把握する際、特に当時のプリフェクトの様子や下級生がどのような雑役を行っていたかについて窺い知ることができる資料となっている。

一方、アッピンガム校の校長を務めていたスリング (Thring. E.)<sup>29</sup> もファギング制度が年少生徒の生活全般にまで労働と残酷さを備えて蔓延しているような場合、その実践は非難されるべきであると付言した上で、次のように賛成の立場を示している。「もしそれが、必要不可欠な正当な規則を意味するのなら、強者が弱者を使役従事者として強制する権力構造は完全に抑制される。その結果、残存する権力は、比較的少数人数の掌に宿ることとなる。彼らが学校において権力の頂点に立つことになったのは、自身の人格と知性によるものであり、その場合にファギングは、抑圧に対する強力な防衛になるのであって、決してその反対にはならない<sup>30</sup>」と述べている。さらに既出のクラendon委員会も、この二人の校長のファギング制度に対する理論的位置付けに対して特に反論を示していない。

### 2-3. ファギング制度への批判的見解

しかしながら、これらの理想的な理論の下に行われたファギング制度の実態に関しては、好ましからざる結果が多く生まれたことは想像に難くない。プリフェクトに選抜された生徒がアーノルドやスリングの期待するほど超越的で極めて理想的な上級生でない場合、または下級生の方に問題の

要因がある場合、あるいは制度的な欠陥等、様々な要因によって彼らが思い描くような校内自治が実現されないケースも考えられる<sup>31</sup>。19世紀前半からパブリック・スクールにおけるファギング制度は多大な批判に晒されており、現実にその批判の指摘する悪影響が校内でも蔓延していた。自由主義者や急進主義者から攻撃を受け、さらに新聞や定期刊行物において、早くも1820年代からパブリック・スクールを攻撃する声があがっていた<sup>32</sup>。

また、次のような記載も見られる。「プリフェクト・ファギング制度は愚かしい事柄が多分に書かれており、公平に扱うことは難しい。少年たちを鍛錬するために作られた今までの最も素晴らしい発見だと称賛される一方、合法化された奴隷制度であると非難もされてきた。このシステムはまだ発達段階であり、今断定する必要はないが、現時点で言えることは、このシステムがなければ、パブリック・スクールの教育において最も根幹となる独特の特徴が失われてしまうだろう、ということである。18世紀後半には既にこのシステムの主要な構成はできあがっており、18世紀末には合法化され、パブリック・スクールの正式な規律としてウィンチェスターやハロウの校長たちに使われていた。」<sup>33</sup>

プリフェクト・ファギング制度に対して賛否両論がある中、反対派の否定は根強い。しかし一方で、伝統的にパブリック・スクールで重要な役割を担って機能してきた制度であるため、パブリック・スクールには同制度がなければならなかったと、制度自体を重要視する見解も示されている。対照的に「18世紀以降、長い間、プリフェクトはほとんど際限のない権力があり、ファッグと呼ばれる下級生に体罰を加えたり、暴力をふるったり、ベッドメイキング、ブーツ磨き、その他さまざまな雑用をさせた。事実、このシステムは経験したものが十分に証明しているように、非常に過酷で残虐なものであったようだ。プリフェクトは多かれ少なかれ習慣によって秩序づけられ、組織化したものであるが、大概はただのいじめとそれほど変わらないものであった。」<sup>34</sup>とあるように、ファッグの境遇や雑役内容については、悲惨な状況下ではびこる愚行という批判的な捉え方がされていることも窺える。

さらに、時代は下るが、1920年代の文献には次のような記載が見られる。「平均的な少年にとってはパブリック・スクールの生活はファッグからプリフェクトへのゆっくりとした旅のようである」ということだ<sup>35</sup>。ここから、パブリック・スクールにおける生活において、プリフェクト・ファギング制度がひとつの大きな学校生活の支柱となる特徴を持っていたことが推察される。また、年少学年では雑役係をこなさなければならず、次第に上級学年になると下級生に雑役をさせる立場になってくるため、いじめや雑役という辛い年少学年次の感情を、上級学年次に解放するという悪循環が校内で繰り返し巡らされていることが示唆されている。

特に注目すべきは以下の記述である。すなわち「プリフェクトの義務は、特権に比べて微々たるものようだ。彼らは朝の出席確認で名前を答えなくともよい。ホールに集まるときも勉強部屋でぶらぶらしていてもよい、ファッグに部屋の掃除、皿洗い、暖炉を温めさせる、朝に礼拝堂に本を持って行かせることができる。さらに、責任を負わされることなく懲罰を課すことができる。最近

鞭打ちに処された新入生は、彼の意見では礼拝の際にこそそそしゃっていたというかどで不当に処罰されたので、復讐の日が来ることを楽しみにしているといった。シックスフォームになるとチャンスが出てくる」というものである<sup>36</sup>。シックスフォーム (the Sixth Form) は最終の2学年をあらわすものであるが、この時期に下級生であった恨みを晴らそうという発想を持つ生徒が存在することを現実にここから読み取ることができる。

以上から、次のように整理することができる。14世紀以来継続して続いていたプリフェクトの存在は、1828年にラグビー校校長に就任したアーノルドによって変化した。プリフェクトに非常に大きな権力を付与し、それによって生徒間の自治を首尾よく促そうとする教義の下でプリフェクト・ファギング制度を肯定的に捉え、同制度は改革された。しかし、すべての学校や全ての時代においてプリフェクト・ファギング制度が良好に機能し、生徒による学校自治が改善されていったわけではない。この点は、様々な文献から読み取ることができ、また実際に暴力体制として具現化されやすい同制度の欠点と危険性について、問題点の指摘と制度そのものへの非難がなされてきた。ところが14世紀に開始されたプリフェクトという存在は現在の英国独立学校にも維持され、プリフェクト・ファギング制度は戦後まで続く。大規模な調査によって独立学校改革がなされた1860年代のクラレンドン委員会の調査によっても深刻な問題を包含する制度として廃止されることなく、第二次世界大戦を跨いで1960年代頃まで継続されることとなった。

ただし、実際のプリフェクト・ファギング制度の内実については同制度が廃止されるよりはるか以前の19世紀から断片的に変容が見られたという報告もある。また、プリフェクト・ファギング制度に見られる訓育の欠陥的事情は生活条件の悪さにもその要因があったとする見方もある。これらの点を含む、監督生制度の変容については次節で言及する。

### 3. 監督生制度の変容

学校によって異なるが、主に特定のプリフェクトに対して個人的に下級生が仕えるファギング制度は、第二次世界大戦戦後暫く続いた後、時代の移り変わりとともに1960年代には次第に廃止されていった。それはある年から一斉に廃止されたという類のものではなく、文献や資料の中に見られるプリフェクト・ファギング制度の描写からも推察されることである。だが監督生制度自体は現在も形を変えて継続され、英国独立学校において概ね効果的に機能している。

近年のプリフェクトについては「監督生は、勉強、スポーツに秀で、人格がりっぱな者から選ばれる。近年は私立女子中等学校などでは生徒の選挙で選ぶ場合も出てきたが、普通は校長が選ぶ。監督生にはハウス監督生と学校監督生とがある。学校監督生の方は学校全体から選ばれ生徒全体の監督にあたるわけだから責任も重いが、大きな名誉にもなる。」<sup>37</sup>という記述も見られ、現在も、プリフェクトを担う代表生徒は校長やその他のチューターに信頼され、多くの場合、生徒の信頼も得ている人物がその責務を果たすという伝統が続いていることが窺える。

プリフェクト・ファギング制度にどのような変容が見られたかについては、以下の文献に興味

深い内容が記載されている。筆者のスノウ (Snow, G.) は、ウィンチェスター校に学び、オックスフォード大学卒業後、イートン校にて補助教員を経験、続くチャーターハウスでは牧師の役に就いている。なお、パブリック・スクールにおける牧師は通常、礼拝や堅信礼での役割のみならず、実際に教壇に立って授業を行ったり、パストラル・ケアの役割を担って生徒のカウンセリングを行ったりと、学校生活の様々な場面で生徒との接触がある。さらにスノウはチャーターハウスでの職務のち、アーディングリー校において大戦後の1947年から1961年の間、校長職に従事している。このように、長年多様な身分で英国独立学校に携わってきた経歴を持つため、学校内における変容の実態に関する記述に信憑性があるものと考えられる。なお、下記の抜粋は校長在職中の1959年に出版された文献による<sup>38</sup>。

「人間関係 (Relationship) についてはパブリック・スクールにおいて、ここ30年で最も変化した事柄である。もちろん学校によって例外はあるだろうが、以前は、教師は教師の世界、生徒は生徒の世界があり、お互いに乖離があった。また生徒は自分のハウス以外の人間との交流が減多になかったため、換言すると、ほかのハウスへ行くことはファッグの用事がある場合以外は禁じられていたため、たいていストレスがたまったり孤独になったりしたものである。しかし、今日では生徒と先生の間柄はより親しいものとなり、普通の人間の友情に大変似通ったものとなっている。つまり、生徒にとり、教師たちは友人のような感覚で接するようになってきた存在なのである。寮長やチューターとの関係もまた然りである。さらに、教師と生徒が会う機会が増加した。チュートリアルやゲーム (集団スポーツ) だけでなく、他の活動、たとえば趣味や工作、芸術活動や討論などの時間において、教師と生徒は活動を共にする機会が多くなった。無論ファギング制度は依然残っているが、それは過ぎ去った古臭い帝国主義的なものではなくなっている。何か雑用を頼むときでも、友人のように 'would you mind (してもらえませんか)' 調であり、'go, and be quick about it (行け、早くしろ)' ではないのである。」<sup>39</sup>とある。

学校生活における人間関係の変化と共に、ファギング制度の変容についても明示されている。教師から生徒に対する言葉で 'would you mind' という丁寧な依頼表現を全ての人間が使用するのかどうかという点、および教師から見た上級生—下級生間ではなく、生徒から見た上級生—下級生間では接し方に相違点が見られないのかという疑問は残るが、1960年前後におけるプリフェクト・ファギング制度の内実が変化してきている点、そして少なくとも帝国主義時代に見られた上級生からファッグへの高圧的な態度は影を潜めることになった点が、上記の抜粋箇所から示唆できよう<sup>40</sup>。

また、「ある学校でのアンケートにて『ファギング制度はまだ行われることに賛成ですか』と質問したところ、25人が『はい』、3人が『分からない』、そして残りの231人の答えは『いいえ』と回答した。ファギング制度はもはや奴隷制度ではないのである。」<sup>41</sup>という記述も見られる。ここから1960年前後において、奴隷制度と形容される代物として横行していたファギング制度については、実施の持続に否定的な意見が多いことが把握できる。

なお、監督生制度の変化の兆しについては、既に1864年のクラレンドン委員会の調査報告書に

においても確認できる部分がある。それは体罰の減少に関する文脈において見られる記述であるが、体罰が劇的に減少した要因については、1828年より没年1842年までラグビー校校長を務めたアーノルドや他の校長たちの改革による結果であると、ラング (Lang, P) は分析している<sup>42</sup>。

さらにプリフェクトや校長による体罰が回避されてきている20世紀前半の状況について「プリフェクトは、規則を繰り返し破ったり、無礼な振る舞いをしたりした生徒に手を上げることが許されているが、最近はそのようなケースも稀である。プリフェクトは、必要ならばたいてい口頭での叱責を行い、それが効果を発揮するであろう。」<sup>43</sup>という記述が見られる。以上のことから、制度としての監督生制度の変化は、ファギング制度が各校で廃止された1960年代以降顕著に見られるが、プリフェクトの性質については、ファギング制度の悪用や帝国主義的なイデオロギーに特徴づけられる大戦前において、すでに変化が生じてきていたことが窺える。

最後にプリフェクト・ファギング制度に見られる訓育の欠陥的事情について、生活条件の悪さにも要因があったとする分析もある<sup>44</sup>。この点に関して、以前の住環境や食事情については、各生徒への体調管理や栄養管理が十分に留意された環境下にある現在の独立学校の生徒現在とは状況が著しく相違している点は否めない。19世紀になっても、住環境や食事情は依然貧弱であり、生徒は空腹を凌ぐために相当程度の小遣いを食料購入に充てていた。またハウスでは1ベッド当たり2、3人の生徒が一緒に寝ていることもあった。特にイートン校の細長い寝室は劣悪な環境下であり、既述のアッピングム校校長であったスリングは、就寝時刻以降は翌朝まで教職員による管理の目が無くなるため、無法地帯と化する、と学生時代を振り返っている<sup>45</sup>。

20世紀になっても依然状況の悪さが垣間見える描写が記録されている。1920年代にリース校 (The Leys School) に学んだ池田潔は、自著の中で、生徒が生活するハウスの様子を「教師の室と病室を除いては学校中に暖房設備というものがない。室内を吹き荒ぶ木枯に一夜が明けて、朝、目が覚めると毛布の裾に薄く雪が積っていること」<sup>46</sup>もあったと懐述している。また、池田が独立学校に在籍した時代には学校で夕食がなく、池田曰くパブリック・スクールの食事は「質からいえば、この (パブリック・スクールの) 食事はイギリス人のもっとも貧しい家庭の一手前のそれであり、量の点では、原文ママ夜食が全然ないことからいっても、その標準にすら及んでいないといえるであろう」<sup>47</sup>と記している。無論21世紀現在は食事情についても改善され、寄宿生は毎日3食の食事がハウスや食堂で提供されている。食事情の悪さについては、小遣いで食べ物を購入することや、親から届けられる差し入れの食料、さらにそれらを友人と分け合うという経験を通し、友人の選び方を学び、親への感謝の心を育ませるという狙いも見られるため、予め教義に基づいて意図された訓育であると捉えることも可能であろう。

以上のことから、20世紀以降も英国独立学校の生活条件は、現在に比して劣悪であったことが認識できる。しかし訓育の欠陥的事情の背景には劣悪な生活条件が影響していた、とされる見解についてはどの程度の信憑性があるのか定かではない。ただし劣悪な生活条件であれば、それだけプリフェクト・ファギング制を良好に機能させる必要があり、そのためには適切なプリフェクトが厳

選されることが重要であったということは推察される。

## 4. 教職員・プリフェクト経験者・元生徒の3者から見る現代の監督生制度

### 4-1. 教職員へのインタビュー

現在の監督生制度が以前と異なる最大の特徴は、それがファッキング制度と対になったものでなく、プリフェクトがファッグを持つことが禁止されているという点である。現在の監督生制度がどのような様子であるかについては、学校関係者へのインタビューの中で触れられたプリフェクトへの言及や、監督生経験者、元生徒への聞き取り調査によって把握できたことを主体として本節で提示する<sup>48</sup>。

情報開示の進む昨今であるが、たとえばザ・ナインの各学校におけるウェブサイトや学校案内においても大々的にプリフェクトおよび監督生制度への言及はなされていない。ただし、各学校、特に寄宿制を採る学校においては、ハウスマスターや教職員、生徒、また保護者らとの相互の意思疎通を密にし、いじめなどの問題が起きた場合には迅速に対応できるよう心掛けている。またハロウ校においては、監督生ではなく、上級生全般の生徒についてであるが、「彼らがハウスにおいてどのような役目を果たすべきか」(What is the role of the older boys in the pastoral care system?)という問いが立てられ、インタビュー形式のショートクリップがウェブ上で掲載されている。その回答として、「自分が下級生の時代を過ごしてきているのでその経験を生かし、現在下級生である生徒たちのプレッシャーやストレスを理解できるはずだ。同様の悩みを抱えて生活してきた経験者として、良き相談相手になることが求められている。」という内容の発言が教職員へのインタビューから見られた<sup>49</sup>。

ハロウ校において筆者が実施したインタビューでは、教務主任(Director of Studies)から回答を得ることができた<sup>50</sup>。ハロウ校は現在も全寮制を敷いており、各ハウスにはハウス代表となる生徒がいる。彼らはヘッドボーイ(Headboy)と呼ばれ、監督生の中で代表生徒の役割を担っている。現在ハウスは12あるため、それぞれのハウスに12人の代表生徒がおり、彼らは自動的にスクール・プリフェクト(school prefect = 学校代表の監督生)となる。スクール・プリフェクトは毎週校長および副校長と面会し、ハウスの状況等について報告する。その他に、10 - 12人程度のモニター(あるいはスクールモニター)と呼ばれる上級生もいる。彼らが、いわゆる一般的な監督生と捉えられる。モニターは学校規模のレベルで、リーダーシップを発揮している、具体的には、たとえばダイニングホールにおける他生徒の監視や、制服についての注意をすることなど、学校生活の全般について責任を担っている。この業務に関しては、アーノルドが挙げたプリフェクトの役割と酷似するものであり<sup>51</sup>、現在においても継承されているプリフェクトの重要な役割であると見受けられる。

教員はヘッドボーイやモニターとなる生徒たちを、自分たちのサポート役とすべく指導している。その役目はいじめ問題や救急措置、児童保護など、パストラルな要素を有したものである。な

お、各ハウスのヘッドボーイの選出については、ハウスマスターが行っている。候補となる生徒がインタビューに申込み、ハウスマスターが決定するという流れである。一方、モニターは教員らが推薦し、学長または副学長が選出する。

次に、シュルーズベリー校については、以下のような見解をインタビューから得ることができた<sup>52</sup>。同校では、様々な場面でそれぞれ異なる監督生（プリポスター）が活躍している。そしてハウスの監督生に加え、スポーツのチームキャプテン、CCF<sup>53</sup>のキャプテンに選出される代表生徒は、明らかにリーダーシップを発揮することに向いている生徒たちであるという発言があった。すなわち監督生の選抜基準のひとつに、リーダーシップを兼ね備えた者という要素が含まれていることが予想される。同校は、長い間培ってきた監督生制度を維持しており、統制された安全な環境において、同制度は生徒にリーダーシップの技能や経験を伸ばしていく機会を提供しているということが、インタビュー中で聞かれた。

リーダーシップの文脈で監督生について言及されることが多かったシュルーズベリー校であるが、ウィンチェスター校の場合は、プリフェクトのみならず全ての上級生が下級生に対して模範の役割を果たさなければならない、という元副学長の話が印象的であった<sup>54</sup>。またプリフェクトは伝言することによってではなく、見せることによって下級生に見本を示さなければならない、そして一生懸命勉学に励むことや、礼儀正しく振る舞うこと、お互い尊敬し信頼し合うことを示すことが大切であると、同校におけるプリフェクトの使命について学べた。ウィンチェスター校もハロウ校同様、全寮制を維持しており、各ハウスにはシニア・プリフェクトがいる。彼らは委員会を構成しており、毎週金曜日の朝に次週一週間における様々な内容について学長、副学長、教務主任と話し合う。ウィンチェスター校では、リーダーとなるあらゆる生徒は学長から選定され、プリフェクトはその中からそれぞれのハウスマスターが選出する。アーノルドの時代から、プリフェクトと教員による話し合いや意見交換が重要視されていたが、その点についても現代のウィンチェスター校における監督生制度の業務執行内容から窺い知ることができた。

#### 4-2. プリフェクト経験者へのインタビュー

それではハウスの代表生徒を務めた経験のある卒業生は、監督生制度をどのように捉えているのであろうか<sup>55</sup>。元生徒がプリフェクトを務めたのはイートン校であった。インタビューが聞き取り調査の冒頭で、ファギング制度が現在は消滅していることを断言した上で、プリフェクトについては現在も、イートン校に何種類か存在していることについて言及した。

イートン校には、各ハウスにそれぞれハウスプリフェクトがおり、各ハウスに所属する最年長生徒10人の中から、ハウスマスターが1人のハウスキャプテンを選出している。ハウスの数は25あり、25人のハウスキャプテンがいる。また、ハウスキャプテン・オブ・ゲームズという生徒も各ハウスに一人置かれている。彼らはハウス対抗のゲームに関する取り決めごとを行う。ほとんどのハウスは代表生徒が計2人だが、ハウスキャプテンやゲーム担当のハウスキャプテンが各2人いる

ハウスもあるという。彼らが各ハウスにおいて、下級生の相談役の代表となっている。ハウスキャプテンは、可能な限り他の生徒の手助けを行い、親しみやすい態度で接する努力が求められている。なお、これら2種類の監督生についてはハウスマスターから選出される。

一方、ハロウ校と同様、イートン校においてもスクール・プリフェクトという監督生も存在する。インタビューの言葉によると、これは日本でいうところのいわゆる「生徒会」のことを指す。前年の選挙で次年度の生徒会のメンバーが選出されるが、スクール・プリフェクトは在校生と教員双方の投票によって決定する。選定の基準として、品行方正かつ生徒および教員双方に人気があることが必要である。この生徒会はイートン・ソサエティ (Eton Society) と呼ばれ、Pope という通称で呼ばれる20人の生徒によって運営されている。スクール・プリフェクトは、朝の礼拝時に生徒の整列や誘導を促すこと、服装の乱れを指摘すること、また必要に応じて懲罰を課す権限も任務として付与されている<sup>56</sup>。さらに生徒が無断で外出していかないよう特定箇所にて每晚監視する役割も担っている。Popeは半分教師、半分生徒のような役割を担っており、多くのルール規制を施行している。

監督生は月に1度開催される他のハウスとのハウスキャプテンミーティングに参加し、懸念事項について適宜討議・報告を行う責任も担っている。しかし、このような多忙な身分でありながら、特権も与えられている。その最も顕著な例が服装であり、Popeのメンバーと監督生は自分の好みに合わせたウェストコート(ベスト)を着用することが許可されている。またネクタイやズボンも一般の生徒とは異なるものを着用するので、そのような服装の違いによって、より代表生徒としての自覚や誇りというもの芽生えてきたと本人は回答している。

このようにイートン校においても、代表生徒の役割を担う生徒がおり、監督生制度が首尾よく機能していることが窺える。任務内容は、アーノルドの時代と著しく変化しているということはなく、一方、監督生には一定程度の特権が与えられているということもインタビューの話から窺えた。

#### 4-3. 元生徒からの回答について

元生徒に対する調査については、2006年から2013年の間で、さまざまな地域における英国独立学校の卒業生から6名の回答を得ている。いずれも2013年現在、30歳未満の卒業生である。2006年度の回答はインタビューによるものであり、2013年度の回答は電子メールでのやり取りによって得たものである。一覧は以下の通りである。

協力者は、ザ・ナインのひとつで、生徒の大部分が通学生で構成されるセントポールズ出身の次表Fを除くすべてが寄宿生であった。AからFの全ての学校において監督生制度が現存しており、プリフェクトの選出方法として、回答者が把握できる範囲では、主に学長やハウスマスターなど学校の教育従事者による選出もしくは生徒の投票、またはそれらの組み合わせで選抜されている。大別すると、学校側主体の場合と生徒の投票が主体の選抜に分かれる。

6名の中で、監督生制度に反対と回答したのはBのみであり、それ以外は同制度に賛成の立場を

英国独立学校出身の調査協力者一覧

	学校名	地域	在籍形態	回答時期
A	セントレオナルドスクール	セントアンドリュース	寄宿生	2006年12月
B	ミルフィールド	サマーセット	寄宿生	2006年12月
C	フェテスカレッジ	スコットランド	寄宿生	2007年1月
D	キングズスクール・カンタベリー	カンタベリー	寄宿生	2007年6月
E	クリフトンカレッジ	ブリストル	寄宿生	2013年11月
F	セントポールズスクール	ロンドン	通学生	2013年11月

表明している。この点に関しては、回答者の在籍時にどのようなプリフェクトがおり、どのような境遇で学校生活を送っていたかという、個人的な体験が回答に大きな影響を及ぼすものであると推察される。Bの元生徒は必ずしも相応しいと思われる生徒がプリフェクトになっておらず、またプリフェクトの選出が教師の好みによっていると推測し、納得できなかったと回答している、さらに制度としてもあまり効果的な役割を果たしておらず、Bは監督生制度に対して時代遅れの代物であるという見解を示している。

プリフェクトの選抜基準については、以下の通りである。特に2013年度の回答者によると、選抜基準が公表されていないために回答が困難とした上で、クリフトンカレッジ出身のEの場合は、何にでも優れたオールラウンダー、すなわち学業成績が優秀で、周りから人気があり、品行方正で外見が整った人物を挙げている。また、セントポールズスクールの場合、選抜方法は生徒による投票を主体にし、その上で教員が何人かのプリフェクトへの投票権を持つ。その前提に立った上で、生徒が投票するのはスポーツマンかつ生徒から人気がある者であり、一方教員が投票するのは学業成績が優秀であることを最優先事項とする傾向が強いのではと想察している。選抜基準については各学校やプリフェクトの種類、選抜者によって重視する点が多少異なっているようだが、上述のイートン校の場合も含め、各学校とも著しい差異は見られないのではないと思われる。すなわち、学業、スポーツ、人格が優れている者で、生徒から人気がある人物が推奨される。しかし、その要素のどれかが特に秀でているのか、もしくは全ての点において平均的に優れているかについては、選抜者側の判断によるところが大きいと考えられる。ちなみに外見が整っていることもプリフェクトの選出条件に加味される可能性が指摘された点は興味深い。

プリフェクトに対する好感度についてはB以外の回答者はいずれも「嫌な存在ではない」程度以上の感情を持っており、彼らは概ね皆親切であり、好感度が良かったという内容の回答であった。例えばCの例では、プリフェクトは皆親切であったとし、他の生徒が引き受けたくないような骨の折れる任務をこなさなければならないので、やはり必要な制度であると回答している。一方Eの回答では、プリフェクトに選出された後に傲慢になってしまう者がいた事実についても記憶を元に言及している。

プリフェクトの業務については、イートン校のプリフェクト経験者の見解と概ね理解が一致しており、学校が異なっても、パブリック・スクールに該当する独立学校においては、いずれも類似する業務をこなしているように生徒には映っている。たとえば他生徒の安全保護、教員と生徒の仲介役、ダイニングホール等での他生徒の監視について列挙している。2013年度に調査した2名については、それぞれ上記に加え、プリフェクトの仕事は学校見学希望者の案内や、大学関係者など来客があった際に代表生徒として対応することも付記している。このプリフェクトの業務という点については、元生徒の回答からも、やはり19世紀におけるそれと基本的な部分は変化していないことが分かった。

また、Fの回答者は、「近年、プリフェクトはファッグを持たないため、ほとんどの生徒は誰も気にしないが、プリフェクトというタイトルや一般生徒とは異なるネクタイを締められる特権、さらに来客時にダイニングホールでより質の高い食事ができる機会があることを羨望する者もいるかもしれない」と推測している。

ところで興味深いことに、以前のプリフェクト・ファギング制度におけるファッグの存在としては消滅したが、現代においてもその役割を変え、機能している学校も存在するようである。Dの回答によると、「プリフェクトの召使という役目ではないが、ハウスでは現在も全ての新入生および2年生が、上級生たちのために新聞やミルク配達をしたり、掃除を行ったりする」と述べている。業務内容が対個人にではなく、学校全体に対し、下級生全員に割り当てられた役割であるため、かつてのファギング制度とは内容を異にするものであるが、これもファギング制度の一種の名残と捉えられるかもしれない。

本節で挙げた教員やプリフェクト経験者へのインタビュー調査、英国独立学校元生徒に対する聞き取り等についての資料は、サンプル数が限定的で、かつ対象とした学校もザ・ナインを中心とした偏りのある学校群であるため、調査内容を全ての英国独立学校の現実としてあてはめることは難しい。しかし、いずれの学校においても、監督生制度としての共通項目を通して事例を見た際、ある一定の傾向が見られたことも事実である。かつてのファギング制度は消滅したものの、既述のように、監督生制度におけるプリフェクトの業務内容は、それほど劇的な変化を見せず現存している。そして、プリフェクトに選出される生徒は、概ねそれに相応しい生徒が選ばれており、監督生制度とプリフェクトの存在は現代の英国独立学校の中で首尾よく機能していることが窺えた。

## おわりに

本論では、14世紀から連綿と続く英国独立学校の歴史の中で、プリフェクトや監督生制度がどのように存在し、また変容してきたかについて考察した。現在のプリフェクトの実態や監督生制度については、限定的であったもののインタビュー調査等を実施することで、実際に独立学校に携わってきた者たちの声を通して一定程度把握することができた。

プリフェクトは14世紀の学校創設以来存在しており、ファギング制度を中心に恒常的ないじめ

や暴力問題となっていた時代を経て、現在は他の生徒の模範となるよう努めている姿が窺える。彼らは下級生をサポートし、校内やハウス内の秩序維持のために教員らと共にコミュニケーションを密にしながら活躍する存在となっていることが、教職員や元プリフェクトの発言から推察された。また一般の生徒も、概ね監督生制度やプリフェクトという存在に対して肯定的な意見を持っていることが分かった。

監督生制度をひとつの枠組みとしての制度というハード面から見た場合、その業務内容は時代が下っても比較的变化が見られないことが分かる。一方、従来のファギング制度が廃止されたことで、プリフェクトがファッグを私用の雑役係として有することがなくなり、むち打ちの特権も廃止され、上級生による暴力やいじめの温床に発展しやすい環境は改善された。またプリフェクトに関して、帝国主義的な高圧的態度に代わり、下級生に対して友好的に接し、常にロールモデルとしての姿勢を示すことが期待されている点に変容が見られる。

アーノルドの時代に隆盛を極めたファギング制度については、人間形成的観点から、概ね成功を収めた制度であるとは言い難い。しかし弊害が多い監督生制度の対としてのファギング制度が、長きにわたって英国独立学校の一つの伝統的特徴を形成してきた点は注目し得る。アーノルドの改革によって校内の自治組織が首尾よく形成されるよう、上級生に大きな権力を与え、ハウスの共同生活集団をまとめようとするコンセプトは今日の独立学校において継承され、概ね成功を収めているようである。またプリフェクトに選抜された生徒は自身のリーダーシップの育成をはじめとする人間的成長を促す機会ともなり、この点から監督生制度が人格陶冶にも生かされていることが窺える。

最後に現在のパブリック・スクールを巡る英国独立学校の状況が、過去に比して変容してきた理由について3点考察する。1点目は1988年教育改革法以来、特に各校とも学業重視の傾向を強め、生徒の入学選抜を非常に厳格化していることである。かつて行われていた縁故入学がなくなり、例えば・ナインに在籍する生徒が総じて知的で人格的にも優れ、比較的均一的な生徒集団を形成するようになっていないかということが予想される<sup>57</sup>。2点目は情報開示の観点からの変容である。近年、独立学校においても第三者評価機関による学校監査が義務付けられるようになった<sup>58</sup>。それにより、各校の学業成績をはじめとする多面的な状況が定期的に監査され、監査結果の情報も公に開示されるようになった。現在、学校の直接的な評判にもつながる公開情報は、ICTの発展により世界規模で迅速に伝達される。そして3点目はパストラル・ケアの徹底が挙げられる。学校・生徒・プリフェクト・保護者等が密に連携を取り、いじめや人間関係のトラブルに対して敏感に対応している。このように現在、古い歴史を持つ独立学校では、変容するプリフェクトや監督生制度の側面を通して、新しい時代変化に即応しようとする姿勢が見受けられるのである。

## 付記

本稿におけるインタビュー内容の一部は、平成 25 - 27 年度 (2013-2015 年) 科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究「英国パブリック・スクールにおける『リーダーシップ教育』の日本モデルの研究」(研究代表・秦由美子教授) における研究協力の成果に基づくものである。

## [注]

- 1 Housemaster, 寮長を指す。
- 2 初等教育段階の教育機関は Colet Court と呼ばれる準備級 (プレパラトリー・スクール, preparatory school) を指す。
- 3 最も代表的なものは池田良三『イギリス教育の伝統と未来: トーマス・アーノルドの教育観と経営実践』帝国地方行政学会, 1971 年, が挙げられる。近代パブリック・スクールにおいて広範囲かつ詳細に記述され, クラレンドン委員会による調査資料 (Clarendon Commission; Public Schools, Report, 1864 年出版, 注 6 参照。) を駆使して近代パブリック・スクールを広範囲にわたって精査・紹介している。他に代表的なものとしては, 宮川敏春『英国人らしさの理想と教育: ヴィクトリア朝期の訓育と母国語教育を中心に』近代文芸社, 1997 年, が挙げられる。同著ではイートン校やウインチェスター校における監督生制度の他, クラレンドン委員会に記載された監督生の実態についても論述している。
- 4 最近の著書では阿部生雄『近代スポーツマンシップの誕生と成長』筑波大学出版会, 2007 年, が挙げられる。「トム・ブラウンの学校生活」を適宜引用しながらプリフェクト・ファギング制度が論じられている。
- 5 佐伯正一『中等教育の発展』高陵社書店, 1973 年, 広範囲にわたる原点にあたり, パブリック・スクールを歴史的観点から詳述している。監督生制度やプリフェクトについてはひとつの項目として挙げられ, 記述されている。また, マックはアーノルドの文脈および 18 世紀後半のパブリック・スクール双方において監督生制度に触れている。(Mack, E. C., *Public schools and British opinion, 1780 to 1860: an examination of the relationship between contemporary ideas and the evolution of an English institution*, London: Methuen & Co. Ltd. 1938.)
- 6 クラレンドン委員会 (別名, パブリック・スクール委員会) は 1861 年に結成し, 英国独立学校の実態調査を多角的かつ包括的に実施。1864 年に提出された報告書は計 4 巻, 2400 頁以上から成り, 公式報告である 2 巻と, 学校関係者へのインタビューおよび質問紙調査等の記録からなる 2 巻で構成されている。特に 3-4 巻には学校内でのいじめや上級生と下級生の人間関係, 監督生制度の実態, 古典学中心の教育から数学・科学教育が導入されるようになったカリキュラム改革, 慈善団体の基金の濫用の実態など, 社会の近代化にともなう様々な問題に言及された膨大な記録が収録されている。クラレンドン委員会による監督生制度への言及は以下の文献にも詳しい。Mack, E. C., *Public Schools and British Opinion Since 1860: the relationship between contemporary ideas and the evolution of an English institution*, New York: Columbia University Press. 1941.
- 7 これはプリフェクトに関する文献ではなく, 現在の英国独立学校をテーマとする文献自体が, 歴史的観点から論じられたものに比して稀少であることを示す。なお, 前世紀以前の英国独立学関する文献については藤井泰『イギリス中等教育制度史研究』風間書房, 1995 年, 43-46 頁に詳しい。
- 8 たとえば, フィンドレイは自身の共著において歴史的観点からも監督生制度にアプローチしている。共著において, 19 世紀初頭から 1980 年代初頭までの英国における中等教育の発展の中に見られる伝統とイデオロギーについて見解を示しつつ, 公立校および, パブリック・スクールを代表とする私立校双方のシックスフォームに焦点を当てて論じている。(Reid, W. A. & Filby, J. L., *The sixth, an essay in education & democracy*, Barcombe, Lewes: Falmer Press. 1982.)
- 9 竹内洋『パブリック・スクール: 英国式受験とエリート』講談社, 1993 年, 104 頁。
- 10 10 鈴木秀人『変貌する英国パブリック・スクール スポーツから見た現在』世界思想社, 2002 年にある記載を解釈。
- 11 Ogilvie, V., *The English Public School*, London: B. T. BATSFORD LTD. 1957. pp. 7-8.
- 12 無論, 現在も紳士養成校としての役割を重視しているが, 独立学校委員会 (Independent Schools Council: ISC) の

- 2013年度版年次調査 16 頁によると、同委員会所属の寄宿制学校の学費は年間約 27,300 ポンド、一方通学制学校では約 12,000 ポンドであり、2 倍以上の差がある。
- 13 現代英英辞典 5 版. Oxford: Oxford University Press. 1995 年の「prefect」を筆者が邦訳。本辞書には「praepostor」の項目は存在しない。
  - 14 講談社英和中辞典 2 版. 東京：講談社. 1995 年からそれぞれの単語を参照。
  - 15 伊村元道『英国パブリック・スクール物語』丸善ライブラリー, 1993 年. 68 頁。
  - 16 Mack, E. C., *Public schools and British opinion, 1780 to 1860: an examination of the relationship between contemporary ideas and the evolution of an English institution*, London: Methuen & Co. Ltd. 1938., p. 40.
  - 17 1798-1836 年の期間シュルーズベリー校で校長を務めた。
  - 18 Oldham, J. B., *A history of Shrewsbury School, 1552-1952*, Oxford: B. Blackwell, 1952., p. 160.
  - 19 Ibid.
  - 20 Findlay, J. J., *Arnold of Rugby*. Cambridge: Cambridge University Press, 1925. なお、フィンドレイは歴史的観点からも監督生制度にアプローチしており、その記述から監督生制度が特定の時代の中でどのような変容を見せているのかが窺える。注 8 参照。
  - 21 藤井泰, 前掲書. 22-23 頁にて改革を行った校長らの名前が言及されている。
  - 22 Clarendon Commission, *Public Schools, Report.*, 1864. p. 152.
  - 23 宮川敏春, 前掲書. 36 頁。
  - 24 Findlay, J. J., op. cit., pp. 229-233.
  - 25 池田良三, 前掲書. 166 頁。
  - 26 仕事内容, 目標の箇条書き共, 同上書, 166-167 頁からの抜粋。
  - 27 同上書. 167 頁。
  - 28 『トム・ブラウンの学校生活』は初版以来、世界中の出版社が版を重ねている。本論では, Hughes, T., *Tom Brown's School Days*, London: J. M. Dent; New York: E. P. Dutton, 1906. 版を参照。
  - 29 スリング (Thring, Edward) (1821-1887) の同校における校長在職期間は 1853-1887 年である。教育の根本理念はアーノルドと同様、キリスト教的・人文主義的なイギリス紳士を養成すること、生徒の個々の能力を自由に伸長させることにあった。教師と生徒の共同生活によって真の教育効果が上げられるという信念を持ち、全寮制を推奨した。現在、パブリック・スクールの名称で呼ばれる独立学校の多くが加盟する校長会議 (The Headmasters' and Headmistresses' Conference: HMC) をパブリック・スクール法制定後の 1869 年に創設した。
  - 30 Thring, E. *Education and School*, Macmillan & Co, 1931. p. 242.
  - 31 ファギング制度の目的のひとつに、合法的な使役を行うためにプリフェクトを厳選し、ファッグを保護するという名目があるが、実際の寄宿舎生活では非合法に、すなわち正規の主人となる監督生以外の上級生がファッグに命令し、小間使いをさせるという場合が実際にあったことがたとえばザ・ナインの 1 校であるウェストミンスター校で 1957-70 年に校長を務めた John Dudley Carleton の記録 (Carleton, J. D., *Westminster School: A History*. Hart-Davis, 1965.) 等に残っている。すでに第二次世界大戦後の話である。
  - 32 Mack, E. C., op. cit., pp. 156-159. を参照。特に p. 157 に一連のファギング制度への批判が記載されている。
  - 33 Ibid., p. 40.
  - 34 Ibid., p. 41.
  - 35 Waugh, A., *Public school life: boys, parents, masters*, London: W. Collins, 1922, p. 171.
  - 36 Ibid., p. 175.
  - 37 竹内洋, 前掲書. 108 頁。
  - 38 Snow, G., *The Public School in the New Age*, London: Geoffrey Bles, 1959.
  - 39 Ibid. p. 59.
  - 40 竹内による文献に「パブリック・スクールが伝統的校風を大きく変えはじめたのは、1960 年代後半から 70 年代前半である。この変化は、『パブリック・スクール革命』といわれたり、もっと穏健に『パブリック・スクールの近代化』と呼ばれている」とある。(竹内洋『改訂版学校システム論』放送大学教育振興会, 2007 年. 114 頁。)
  - 41 Snow, G., op. cit., p. 54.
  - 42 Lang, P., 'Pastoral Care: Some Reflections on Possible Influences', *Pastoral Care in Education: An International Journal*

- of Personal, Social and Emotional Development*, Vol. 2, no. 2, 1984, pp. 139-140.
- 43 Snow, G., op. cit., pp. 68-69.
- 44 佐伯が、上級生が奴隷のようにファッグを使役し、学校では暴力体制がはびこっている点に鑑み、ファギング制度への世情からの相次ぐ非難について記した文脈において、「寮生活を中心とした訓育欠落の背後には、生活条件の悪さもあった」と指摘している。(佐伯, 前掲書, 75頁。)
- 45 Ogilvie, V., *The English Public School*, London: B. T. Batsford Ltd., 1957, p. 124.
- 46 池田潔『自由と規律』岩波新書, 2000年. 65-66頁。
- 47 同上書. 83頁。
- 48 第4節におけるインタビューに関する文章はインタビュー協力者の話を、可能な限り本人の発言に忠実にまとめたものである。独立学校の学長、元副学長、教務主任へのインタビューは予め質問票を作成、電子メールで送付し、後日現地へ赴き、インタビューを実施した。インタビューでは予め送付した質問票と同じものを使用し、順次質問を行った。イートン校出身のプリフェクト経験者に対するインタビューは、面会日に直接筆者の方で用意した質問を口頭で伝え順次回答してもらった。半構造化インタビューの形式を取り、会話が逸れた場合にはそのトピックについて詳述してもらった。独立学校出身者のインタビューについては2006年、2007年のものについては事前に作成した質問紙を面会時に提示し、その場で回答してもらった上でそれに基づいてインタビューを行う形式を取った。一方2013年実施の2例については、電子メールでのやり取りによって回答を得た。
- 49 Harrow School, *Video FAQs on Boarding Life*, 'What is the role of the older boys in the pastoral care system?' <http://www.harrowsschool.org.uk/1824/boarding/video-faqs-on-boarding-life/> (last accessed 05/11/2003)
- 50 筆者によるハロウ校におけるインタビューより。(インタビュー実施日: 2013年6月5日)
- 51 注26を参照のこと。
- 52 筆者によるシュルーズベリー校におけるインタビューより。(インタビュー実施日: 2013年6月6日)
- 53 CCF = Combined Cadet Forceの略。通常CCFと表示される。いわゆる軍事教練のことであり、多くのパブック・スクールにおいて現在も実施されている。
- 54 筆者によるウィンチェスター校におけるインタビューより。(インタビュー実施日: 2013年6月12日)
- 55 インタビュー調査は日本国内で行った。なお、当該人物のイートン校在籍期間は2004年から2009年である。(インタビュー実施日: 2012年7月30日)
- 56 インタビューによると、イートン校の懲罰は、基本的に軽度のものから遅刻者名簿 (tardy book), 居残り (detention), 停学 (suspension), 放校 (expulsion) となっている。expel (放校) させられる場合はドラッグの使用などで、この場合は即刻退学しなければならない。また、現在は体罰が禁止されているので鞭打ちはなく、Popeが与えられた懲罰の権限は遅刻者名簿に限定されており、それ以上重い懲罰は行使できない。遅刻者名簿は遅刻してきた生徒だけでなく、礼拝で私語をした生徒をPopeが見つけた場合、彼らに遅刻者名簿の懲罰を1, 2日間与えるということもある。
- 57 3校の教職員やプリフェクト経験者へのインタビューによると、入試選抜は知性の高さを前提とし、人格的にも優れ、またスポーツや芸術における才能を持った生徒が厳選されるという。
- 58 独立学校の監査は現在、主として独立学校監査団 (Independent Schools Inspectorate: ISI) が実施している。2002年教育法162A条を受け、2003年からISIは「監査を目的とした認可機関」(a body approved for the purpose of inspection) となり、イギリスの教育省と教育水準局 (OfSTED) によって主たる独立学校の監査機関の役割を担い、各校が英国教育省の定めた規定を守り、水準を満たしているかを報告・公開している。